

親鸞最終文献「自然法爾章」の日本学的構想 (第十回)

小野正康

第一、由来、「親鸞教学の日本学的構想」中

第1回「学」―「日本学」―日本学的構想

第2―7回 親鸞の名著『教行信証』につき、連年順次に

「教・行・信・証―真・化」の六回

第8回「疑問」と「明証」

第9―10回 右以後の思想信仰に亘る主要問題―1、「和

国の教主聖徳皇」の和讃、善鸞義絶文とこの問題点

検 2、「自然法爾章」の由抛・思想

第二、態度、「日本学的構想」中

1、己が心の糧を真目的に、原本文即自の独り読み―宗学

等とは全く無関係

2、日本文化教学の図式化(新拙著『日本学開発』(三九一頁)

五重塔・富士山型…在と成・生

3、「哲学↓倫理↓宗教」の縦の基本的三重層観―親鸞の

「如来廻向」と我が国人の降臨思想(拙著『親鸞教学の日本

4、三観点(実践体系・教学体系・価値体系)よりの問題

親鸞最終文献「自然法爾章」の日本学的構想(小野)

視と考察

5、生仏交渉関係―対立的と一如的(連続と転向)―1、

知れば事足る 二、歴史的客観的転移(三國伝通縁起)

三、自ら成り生きる(例、道元『眼蔵』生死の巻、入我

我入、親鸞の「至誠心」・「信誠」・第三位の「信」…)

6、「自然法爾」の見方と修し方―内外古今の問題・構想

一、求道・聞法・修行…道・法・行…求・聞・行の方式…

…人の性格 威張る 発表式
内省の 謙抑型

二方途・型式

積み上げ式…理想主義・解脱

掘り下げ式…聞法・窮理・修行

―祈願・救済…他力浄土門的

「謙敬聞奉行」…「諸仏等同一回事」―「信心の人をば

諸仏にひとしとまふすなり」(『末灯鈔』(六六六頁))…

「仏智不思議と可レ信事」(六六七頁)

二、対処方

親鸞最終文獻「自然法爾章」の日本学的構想（小野）

一三四

天然自然 自然科学—自然主義
天理人道 人為立法

对立：利用・征服—コン等々 欧米的 对立

二極：神・存在

自然
同化：「任運無作」「随流認得其性」東洋的
心・身一如：神・仏・人—道・法・行の途上の
道標：揭示板

1、『往生要集』・『神曲』

2、象も駱駝も居ない日本の山河・自然の人情

3、二河白道：「三定死」、「遣喚」——「須臾即到西岸」

永離諸難、「願と信」、「一心正念」

4、「科学には国境がない、しかし、科学者は祖国をも

つ」(パスツール)

5、「神ながら言(事)あげせぬ」…歴史…本↓末
終↓始

「為物身、実相身」、「事と無碍法界」、「これはく」と

ばかり花の吉野山」

6、対立の極…神…God…全知全能観へ—神の存在
仏…釈迦…憑まれる者の成立—修行成就

7、誓願…アマミダ仏への成就—四十八願—十八願—王本願
「見畏む—益貴神」—神勅…大御心

8、願↓信…何に由拠して自らの現実を積極的に肯定す

るか、しえられるか。
目的・全体観よりの是認、死にたい—自決、安樂死

の問題等々

第三、自然法爾の問題—由拠と思想

1、文化教学的諸背景

自然と文化の対立—西洋と東洋との相異—自然科学
の自然—日本人の自然観

2、親鸞の「自然」についての文献上の用例

(イ)『浄土三部経』に、『大経』中55回、『観経』中6

回、『小径』中1回

(ロ)『教行信証』：『親鸞聖人著作用語索引』より、

「行巻」に

「十住毗婆沙論」：「菩薩是の地を得れば、心常に歓喜多し、自
然に諸仏如来の種を増長することを得。」

「阿弥陀経」：「到レ彼自然成三正覚、還三来苦界二作三津梁。」

「述文贊」：「自から果を獲ざらんや、故に自然と云う。」「易

往而无レ人、其国不三逆違、自然之所レ牽…」

「正信偈」：「自然即時入三必定、唯能常称三如来号、応レ報三

悲弘誓愿。」

「信巻」に

「大経」：「必得三超絶去、往三生安楽国、横截三五恶趣、恶趣

自然閉、昇レ道无三窮極、易レ往而无レ人、其国不三逆違、自然

之所レ牽。」

「礼賛」：「…聞三妙法—十地願行、自然彰」

『涅槃経』：「字三悉達多、无レ師覚三悟自然—而得…」：「聞三其

名三者三毒之箭自然拔出。」

「証卷」には

『大經』…「容色微妙、非レ天非レ人皆受自然、虚无之身、無極之軀。」

『論註』…「但登初地、以漸増進、自然当与レ仏等、…」皆以本願力起。譬如阿修羅琴雖无鼓者、而音曲自然。」

「真卷」には

「法事讚」…「從仏逍遙、帰自然、自然是弥陀国…」

「化卷」には

『大經』…「一切衆宝自然合成…自然化成…」…「受諸快樂…皆自然」

「法事讚」…「還本国一切行願自然成」

『仏本行集經』…「住於定中、得自然香美飲食。」

「和讚」より

「浄土和讚、讚阿弥陀仏偈和讚」

宝林宝樹微妙音、自然清和の伎楽にて

哀婉雅亮すぐれたり 清浄楽を帰命せよ。

「大經意」

定散自力の称名は 果遂のちかひに帰してこそ おしへざれども自然に 真如の門に転入する。

念仏成仏これ真宗 万行諸善これ仮門 樞実真仮をわか

ずして 自然の浄土をえぞしらぬ。

親鸞最終文献「自然法爾章」の日本学的構想（小野）

「高僧和讚」

道綽禪師

一形悪をつくれども 専精にこゝろをかけしめて つねに念仏せしむれば 諸障自然にのぞこりぬ。

善導大師

五濁悪世のわれらこそ 金剛の信心ばかりにて ながく生死をすてはてて 自然の浄土にいたるなれ。

。信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり 自然はずなはち報土なり 証大涅槃うたがはず。

「正像末和讚」

九十五種世をけがす 唯仏一道きよくます 菩提に出到してのみぞ 火宅の利益は自然なる。

他の『仮名聖教』より

同じく「法爾」について

「信卷」…「法爾として真実の信樂無し、是を以て…」

「化卷」…「具に…法爾なるが故に難行道と名づく…」…

「末法法爾として正法段壞し三業証し無し」(以上、○印注意)

3、「自然法爾事」と「自然法爾章」

前者は『末燈鈔』86歳、親鸞自記。後者は三帖和讚末尾「親鸞八十八歳御筆」蓮如註記による。

相異の点

初に、「獲得名号」の釈の、前者に無きを後者に有ると、

中に、次の「」内の句の、前者に有ると後者に無きと、法爾は、…この法の徳のゆへにからしむるといふなり。すべてひとはじめてはからはざるなり。…このゆへに義なきを義とするとなり。

終に、二首和讃は、前者に無く、後者に有る。

第四、自然法爾章の六区分と要義

(1)、「獲・得」と「名・号」との各字を因位と果位に分つて区分する。

因位の時に「うる」、果位の時に「いたりてうる」の実践体得上の両区分か。

(2)、同じく「自・然」と「法・爾」の各字義より、これを行者と如来に分つて、「行者のはからひ」ではなく、「如来の御ちかひ」との區別。―この故に、「他力には義なきを義とす」との明示。

(3)、「自然」の再説―「もとよりしからしむるといふことば」―「弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南无阿弥陀仏とたのませて、迎えんとはかられる」ので、「行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とはまふすぞ、ときゝてさふらふ。」とて―それで、行者の「知・信・行・証」などの知悉や善悪觀念等の介入は斥けられての「聞即信」の信知で、「もとより然らしむる」ので、彼岸への白道は、先方より発しての橋渡しであろう。―

従つて、予想的中実現へのはからひは、恰も自らの帯を摺んで自らの体を引き挙げるの趣向ではなくて、更に譬えらるゝと、求める者の、此の背後から不意に不慮的に水を引つかげられた、が、如きの、自他の心的経験なる局面転換が、「信の一念」の実感、というものではなからうか。

(4)、この「弥陀仏」の「ちかひのやうは、無上仏にならしめんと誓ひたまへる」のであるが、この「無上仏とまふすは、かたちもなくまします」ので、そして「かたちもましますぬゆへに自然とはまふすなり」とあつて、―従つて、逆に言つて、「かたちましますときは、无上涅槃とはまふさす」―引いて、「かたちましますまぬやうをしらせんとて、はじめて弥陀仏とぞ、きゝならひてさふらふ。」とある。…こゝに「やう」は、用（役立）か、要か、様か。

(5)、この「弥陀仏」は何の「やう」なのか、何の用向き（究竟の願）か。「弥陀仏は、自然のやうをしらせんれう（料）なり。」―それで、「この道理をこゝろえつるのちには、」どうすることか、というに、「この自然のことは、つねにきたすべきにはあらざるなり。」である。これは何故か。「つねに自然を沙汰せば、―義なきを義とす、ということは、なを義のあるべし。」ということになる。「これは仏智の不思議にてあるなり。」であるから、と。これというは、即ち無碍人―仏者―信者―常民などの謂であるのか。

(6)、以上の思惟の如くにして、「無義の義」、「仏智の不思議」等の当然の帰結としてか、次に和讃の二首

(1)「よしあしの文字をもしらぬひとはみな、まことのこゝろなりけるを、善悪の字しりがほは、おほぞらごとのかたぢなり。」

とあり、かくなるが、これに対し、世には「進歩的文化人」という者のあり、「専門バカ」という者の出てくる。これは何故か。「葭・蘆・葦」―「葭^{よし}蘆^{あし}葦^{あし}張^{はり}り―などという文字の穿鑿など／＼の一切を知らぬ無学文盲の人らと、善悪・美醜・真偽などを識別し論議して、互に観念論を言あげ闘わずインテリ、この輩との比較、一見その差の様相を察知しえよう。もと／＼「よしあしの文字」の、右にも一端を見た其の植物の名の、「アシの音が悪しに通ずるを忌んで、善しに因んで呼ぶ」と、「広辞苑」にはある。わが『古事記』には「葦牙の萌え出」ること、パスカルの『パンセ』に「人間は考える葦」という名句のあるは、古今東西知識人の既に注目し引用するところのもの。次に

(2)「是非しらず邪正もわかぬこのみなり。小慈小悲もなければども、名利に人師をこのむなり。」

右のインテリ・知識人と、無学人・常民との比較から、「名利に人師を好む」ものの性情と、真乎に道を求め行を修する人士と、この真摯の反省には、法然が「法師に三つの髻^{もといり}あり、

勝他・利養・名聞これなり。」と、筑紫よりの修行者への誠をよぶ。なお、かの「文字禪」や自称科学者の進歩発達を口にすると公害頻出なる他面の公認通念、「人の文字を知るは憂

患の初」とのシナ賢者の心情省察と、真の儒者にも二意あり、とする国学者の指摘が生れる。即ち、文字に泥み装う表面の儒者とその文意に自ら立つ真の儒者との差異、ひいては、自称進歩的文化人と謂ゆる説教に称揚される妙好人型と、念仏成仏の自然法爾の教養人の故に、おのずからにして真如の門に転入する輩との、而して作爲的ならず一人相撲ならざる誠心においての、これら何れがよりよく、真意の日本学的常人と成り生きるのであろうか。

第六、日本学的構想

1、以上、主著『教行信証』以下『和讃』など、親鸞の信仰思想の諸構想を顧念して、就中、「教↓行↓信↓証」と「真↓化」なる実践的と評価的なる思惟法、並に、「太子和讃」中の「和国の教主聖徳皇」なる歴史認識は、横の、「印度↓震旦↓日本」の三国仏法伝通縁起による「無師独悟」式を思む他面、「入宋伝法沙門○○」式なる師資相承と的々法統の天下りをば、仏法学的とする、謂わば、「在↓在↓在↓在」なる形式的的一面に対し、如何にして、縦に、自国の古えに溯及して、しかも「教主」と崇め尊ぶ此の思惟が、此の一愚禿僧に生れ来り、儼然として成り在つてゐるか。しかも

この一和讃の表現と思惟の言葉は、彼と彼の浄土真宗第一級の文字と思惟との両者であるが、これが如何ほど、思想思惟の新型として、日本仏教界に、否な、当の真宗教学界においてすら真実に重要視されたか、され来つてゐるのであろうか（拙著『親鸞教学の目』。更に進んで、もし、これとこれ以前の作たる、例えば、「正信偈」の、即ち『教行信証』時代と此の「行巻」には無いか？もし有りとなれば、この形と思惟性としての歴史認識と、ひいて謂ゆる七高僧などへの価値評定などは、どう変り、替つて作られていたであらうか。これが単なる外来宗教の物マネ的な横流しならざる土着性なる一面としてだけでも、さしあたりそれが指導基準と件の「宗学」としては勿論、且つは、朝夕仏前に誦読する如上の日本人真乎の仏法者・妙好人・信者らへの影響には、どれほど図り知られざるものが生来し、していたであらうか。

さて、局面を更えて思うに、この種の日本学的思惟者は、多くの仏者中・名僧知識中、ただ此の一人のみか。彼の『教行信証』中、所引の他の諸「高僧」に、並に、他宗他門のそれにも、在らまほしく出まほしく祈念しているのであるが、依然として無いのか。私は、拙書『日本学の遺統』、並に、これを一中軸とした『日本仏教の倫理学的研究』以来、仏教学会等を機会にも、言葉を尽して訊き諸学者の教を乞うて来ているが、今にまだ教えられていない。

2、「誓願」―「無義の義」―「仏智不思議」…一連の思想思想の実現人において、「至り獲、且つ、いたり得た」生成境よりしてのもの、同じくこの種の聖者位に至り安じ得たものとして、さて、この一連の思想思惟として「古今一すじ道」とこの「疑問」―祈念と建現として、至り得るに値する「誓願」的のもの、引いてこれが「明証」有りとなれば、これは何か。―日本学的思惟者を最として広く日本人一般としても、この種、信奉者の祈り需めるもの…岩戸精神…神勅…惟神道の真髓道においてはどうか。

3、これを歴史と伝誦と、信仰祈念と思想思惟と史実の跡付において、髣髴せしめるもの、諸面に多々あらうが、この中に通念としての標語に、
「正直の首こゝろに神宿る」と、

「心だに誠の道にかなひなば、祈らずとも神や護らむ」とあるは、奈何。就中、「祈らぬとて」の、古今東西、日常と生活に、宗教儀式の「祈る神仏基等の多き中、中でも仏教的な「発願修行」―往いて生れる―「仏に成る」、これら積み上げ式の実践体験中に、さすがの「賢善精進」者も、今や自らの志念の強盛なるに反比例して、おのずから「虚仮を懐く」に気付いて、自らに掘り下げしめられる、の避けえざる心境に至るや、―身近の著例としては、公害・病患の公認、

船車道橋の欠陥自認、人身精神の脆弱廢化等々―この自力祈願者のこの故を以つての不相応と不成就の、ひいてその極、却つて己が造悪無善なるに気付くであらう。この全環境と表裏の心事に対応して、「神や仏のかねて知らしめし」て願を発し行を修して成就し廻向したもうものに、この神・仏の性格と「護らむ」の降臨と廻向と撰取に己をあげて信順し帰依して、由り抛つて自らの現実を積極的に肯定しえて、Pantheism 的に、「み民あれ生ける驗」に、己が所与の生成在を寿ぐ一事に立ち到る、この帰趣に徹せぬであらうか。

4、上来、新拙著『日本学開発』の一軸たる「哲学―倫理―宗教」なる向上し向下する縦の三重層型、この「哲学」としての最初の原点と以下の諸措定等々については、此の著に発し、次巻に「学」論、次々に「原理」・「体系」…への諸論著に至るもの、而して古今一すじ道の富士山型に末拡がりなる五重塔式の「神・仏・儒・洋・日本学」なる日本文化の全構想―日本学なるものの対象である。仍つて、さきの親鸞の至り着き成る信仰思想教学も、これら一連貫性の一鎖たる道帯として、その時・所・位の優れた日本学的構想者たるものと私においては思惟し構想されるのであり、するのである。

5、願れば、以上、連年十年間、欠けることなく休むことなく、第一年「学なる構想」より、彼が主著『教行信証』の卷々を逐うて、且つ、主要思惟の大意に及び到つた。

親鸞最終文獻「自然法爾章」の日本学的構想(小野)

これを大観するに、親鸞教学の如上の結構、これが由抛表の「三部経」、而して主著総序に「竊ヒツカニオンシレバ以」に始まるものは、自ら掘り下げしめられた実践者への救済として、概言すれば、『観経』所説の阿闍世への連想が強い。次に、この「浄土真実教を顕わす文類」の第一文字に、「謹ツツシク按アツク」るものは、これが由抛たる『大経』所説の誓願である。これらが生み出し在らしめられているものは何か。残る『小経』の一結構として、これが「古今一すじ道」最初の「神道」に承けて、時代の支配教学を己がものとした彼の仏教々学、この位置付の日本学的構想に、親鸞と太子との如上の交渉等は史上既に諸例諸論あるも、親鸞と太子を通して遠く神道との積極的なそれは、恐らく僅少なるか。如上、ここに、彼の実践帰向の「終↓始」的認識の限り、遠く天照大御神の「見畏↓益貴神」への先蹤道に由抛する次第と見られえ、次に、彼の誓願として仰ぎ奉じて自ら依り憑むものは、同じく「神勅↓詔勅」類と見られようか。而して現実に生ける驗として積極的肯定に安住せしめられるものは、如上、自然法爾なる現実個々の日本人生活として、如々としてそれ／＼それ自らにあらしめるは、「邦家之経緯、王化之鴻基」―「修理固成」にこそあり、更に、これら文面よりは事相、この一たる弥生土器より縄文土器への形相等に、と見る段々の、その一々の試行たるに、と見定めるは奈何。(47・11・13)